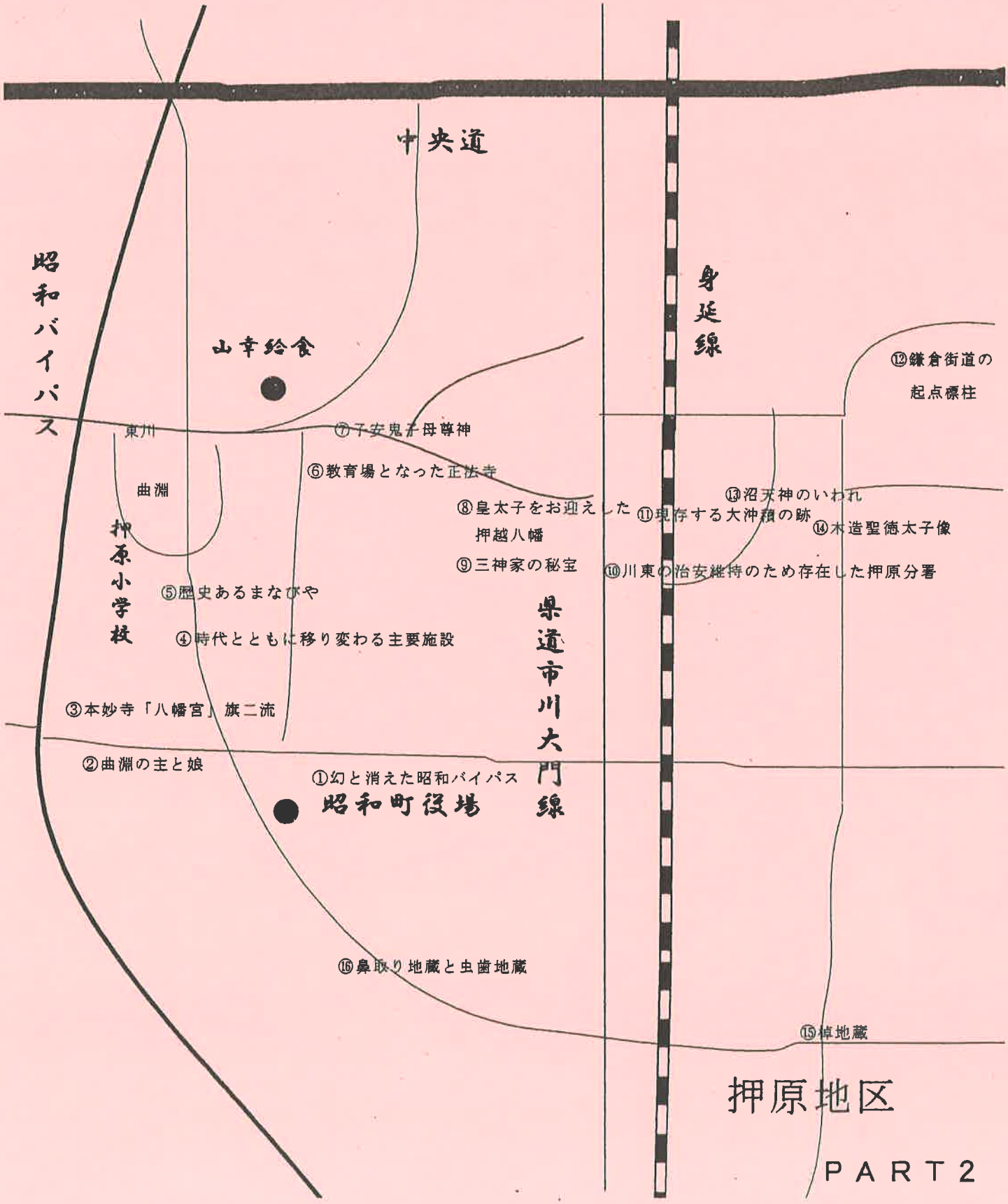
タイムスリップ路



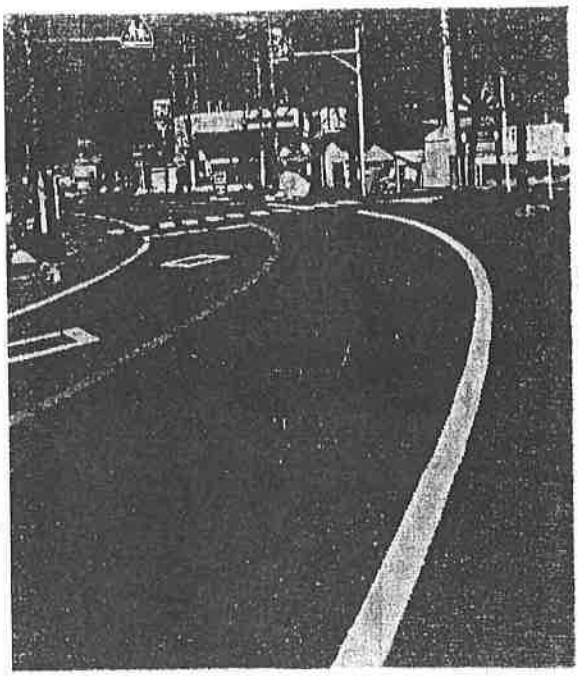
押原地区

PART2

① 幻と消えた昭和バイパス

五本杉から右折して昭和バイパスは現在中島の北、築地の南の圃場を飯喰地へはしっている。しかし当初の計画は現在の役場、公民館前の体育館をぶち抜いて、中学校々舎の間を総合会館、児童館をもぶち抜いて通る筈だった。しかし時の当局のえい智は根強い反対を続けて、地下式案も蹴り現在地へ迂回させてしまったのである。

みのぶ路と文教地区、行政の中心ともいうべき押越の曲淵が車時代の騒音から逃れ得、幻のバイパスとなったこの教訓はひとしく町民の忘れてはならない点だろう。



② 曲淵の主と娘

昭和町押越に、曲淵と書いて、「まがりぶち」と読む地名があります。戦国時代のことですが、そのころ、曲淵という深い淵が、この集落にありました。

油を溶かしたような水をたたえ、何となく、吸い込まれるような不気味な雰囲気を醸していたので、村人は、何時とはなしに、[竜神が住んでいる]と言い伝えるようになりました。

この淵の西側に、曲淵堂という一軒家がありました。この家に、年取ってから生まれた一人娘が、仲良く暮らしていました。娘は、この辺りでは稀にみる器量人でありました。

それは、ある秋の、月が煌煌とさえた戌刻(午後八時～九時)ごろ、娘は一人で、両親の寝息を聞きながら針仕事をしていました。

と、(トントントン)と、突然、誰かが大戸を叩きました。

「だれずらか?」

娘は訝りながら、少し戸を開けた途端、びっくりしました。

まるで天から降りてきたかと疑うほど、色白で、鼻筋の通った美青年でした。青年が一夜の宿を頼むと、娘は喜んで迎

て、玉のような男の子を産みました。
こどもは成長するにつれて非常に賢くなり成人してからは、「曲淵庄左ヱ門」と名乗り、甲斐の領主、武田家に仕えました。
そして、重臣としてかずかずの手柄をたてたということです。

③ 本妙寺「八幡宮」旗二流

曲淵庄左ヱ衛門は武田の家臣で、海ノ口や川中島の合戦で勇名をとどろかしたが、武田氏滅亡の後は徳川家康に仕え、甲斐の守に任じられ江戸奉行にもなった。その五代目の子孫の朝臣従五位下野守景衡が甲府城三代目の勤番として甲府城へ来た。

享保十年十月二十三日、城内の三分の一の百七十騎の行列曲淵はすでに東川によって三分の一に埋まっていたといわれている。景衡がこの寺を訪ねたときの様子が語り継がれている。甲府城代が祖先の墓参りに来るという触れで老若男女衣服を改めて土下座して沿道で迎えた。「下に下に」の声に寸時も頭を上げることができず、村人の多くはお上司様がど

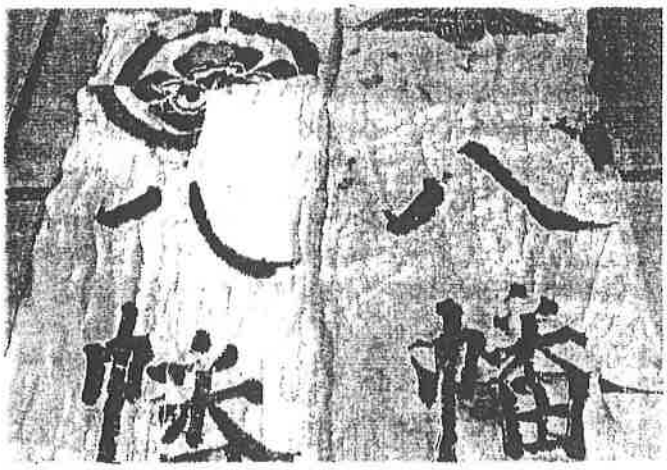
えました。
それから2人は、夜のふけるのも忘れて話し合いました。
しかし青年は 夜が開けないうちに出立すると言い出し、名残を惜しみながら、娘に別れを告げました。
[この人の家を知りたいなあ]
そう思った娘は、縫いさしの白糸の長くついた針をそっと、青年の袂に差し込みました。
やがて朝がきました。娘は糸をたどりはじめました。すると糸が、淵を溶かしたどころか、真っ赤に染まった淵の中に垂れていて、水面には、大蛇の巨体が浮かんでいました。
そんな事件のあったあと、娘のお腹がだんだん膨れ、やが

のような顔でどんな風采だったのか、行列が離れるまで知らなかったという。その折り邸内の八幡宮に納めたのが庄左ヱ衛門が従軍した時の馬印の軍旗二流である。血痕が生なましくある血染めの旗で、明治初年本妙寺へ庄左ヱ門とその母の墓や若宮八幡の厨子とともに移され、今日寺宝として保存されている。

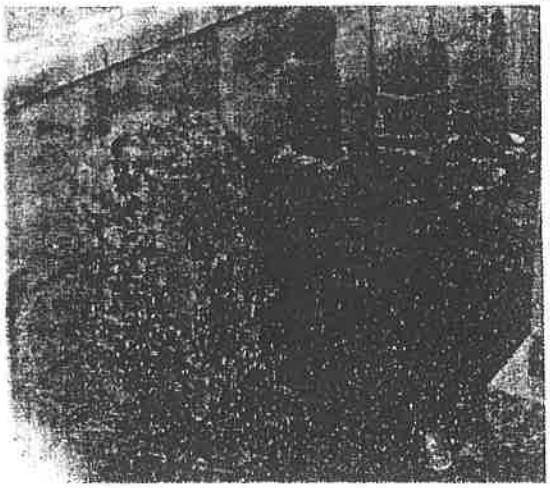
旗は本麻地、巾二尺二寸、長さ八尺で若宮八幡とあり、日付、書名とも景　衡が別布で書き、縫いつけてある。今から三〇〇年前のことで甲府城勤番は二人で山手勤番と下手勤番とになっていたが、景衡は山手勤番を二年つとめて江戸へもどっている。

境内にあるイチョウの大樹はそれ以前からの老木で、町内の巨木の一つに数えられている。このイチョウの葉の落ち果てないうちは麦を播いても差し支えないと言い伝えられ長い間村民に親しまれてきた巨木である。

書納幸旗二



血痕のつきたる軍旗（一部）



庄左ヱ門の墓

④　時代とともに移り変わる主要施設

明治二十二年町村制が施行され、旧西条村、押原村、常永村が西条村常永村外二カ村とし、組合区域の指定により西条

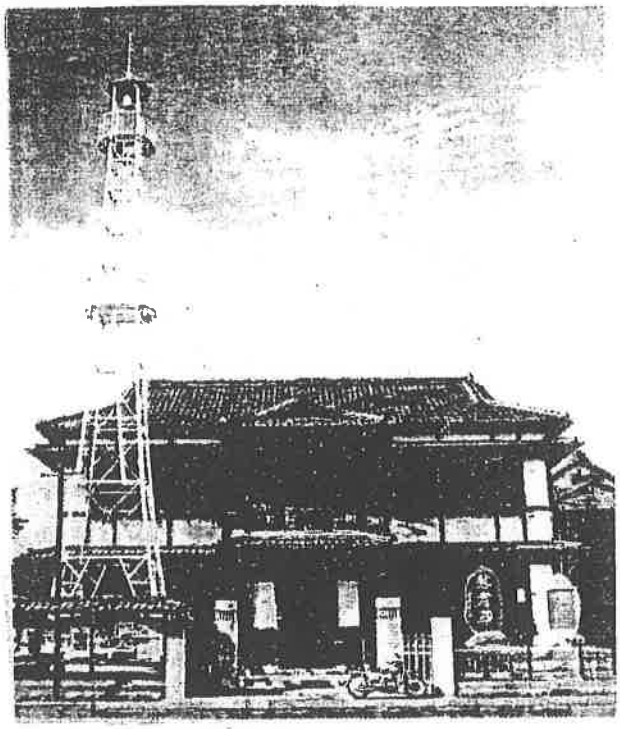
村外一カ村組合役場として押原地区内の曲淵に建てられた。

それからおよそ五十年後の昭和十二年六月に、小学校々門に役場が立てられ、さらに昭和五十五年、現在の庁舎が建てられ現在にいたっている。最初の庁舎は平屋建ての五十坪にも満たないものだった。昭和十二年建設の二つめの庁舎は二階建てで、明治初年の鹿鳴館時代の様式を取り入れた当時としては豪壮な評判が高かった。取壊された跡地には二基の戦争による忠魂碑が残っていましたが、六十三年八月に総合会館入り口に移転されている。

駐在所も元々は最初の庁舎の右にあり、やがて道路の反対側のポンプ車に移り、現在は商工会館となっている。現在の給食センター付近には青年学校もたてられたが、終戦とともに一時青年団など社会体育施設に改造されたりもしたし、錦町時代の県庁時代の守衛控所が払い下げられ、五角堂として親しまれ青年団活動の拠点になったり、その後の昭和郵便局となったりした。

昭和四十六年秋公民館が、同六十一年総合会館が現在地にたてられたのであるが、それ以前、分けても戦前の社会教育や婦人会、青年団などの集合場所は学校校舎のみに限られ併用利用されていて独立した施設はなかった。

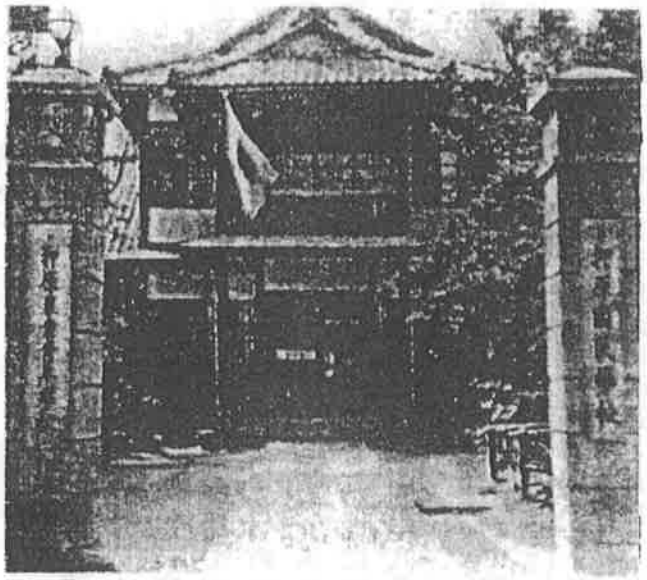
⑤ 歴史あるまなびや



押原小・中学校は明治十七年、西条・押原・常永の三ケ村が連合して押原尋常小学校となり、明治二十年現在の体育館南に藤村式校舎が二階建てで建てられた。その後この本館を中心に一号館から四号館まで増築され、やがて本館裏に講堂が設けられ校庭も拡張されたり四号館が本妙寺近くへ移動したり、さらには現在一つ残っている五号館が昭和七年に増

築されたりした。

敗戦後の昭和二十三年、六・三・三制教育制度となると、一時は講堂や廃止された青年学校で行われた中学校も、やがてみのぶ路沿いにプレハブ校舎が建ち、昭和二十四年木造二階建ての中学校校舎、同三十年特別教室なども建てられ、校庭も小・中共用の時が暫く続いた。が、昭和四十四年小学校は鉄筋コンクリートの現在の校舎となり、中学校も昭和五十一年独立した。また今、新しい教育課程がスタートする平成十四年度にあわせ常永小学校建設が進められている。



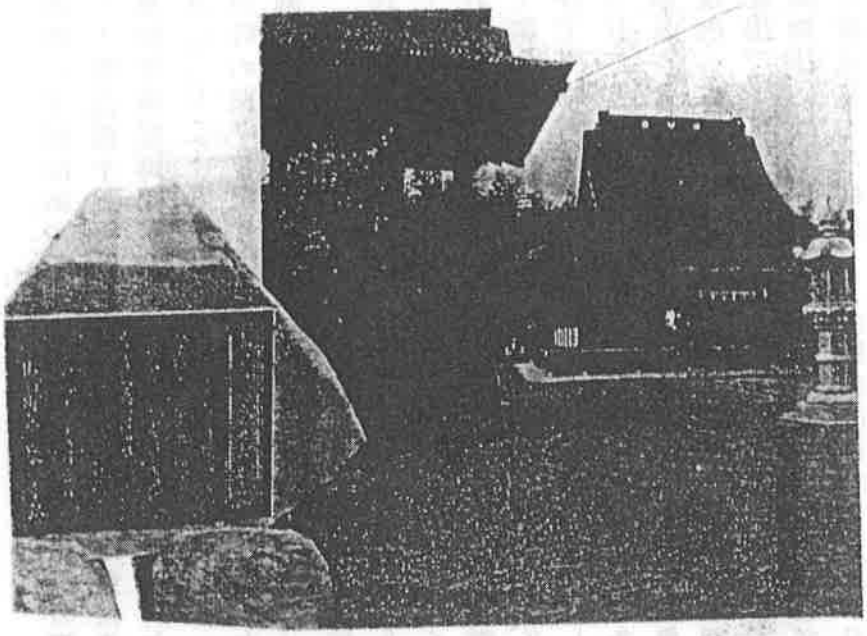
旧押原小学校

⑥ 教育場となった正法寺

正法寺は富士郡北山村、日蓮宗本門寺の末寺で、もとはみのぶ路沿いの五本杉にあった。天正六年（一五七八）五月大洪水のために流され、荒廃地を捨てて現在地に移された。

この五本杉という地名の由来は正法寺に由来する。西応三年経塚に草庵を結んだとき本門寺の七本杉にならい五本の杉を植え以来それが地名となっている。昭和六三年、ホタル発生地が作られたおり、その一角に正法寺跡地の碑がたてられている。

この正法寺では、安政三年（一八五七）から明治初年まで僧侶日道により寺子屋がひらかれ、本妙寺住職伊藤日遵（湛山と号す）とともに庶民教育機関として近郷の子弟を相当数教育しているが、当村　初代組合長　内藤宇兵衛氏も湛山の教を受けている。湛山師歿後約五十年の昭和三年春、墓碑が建設され、碑文はかっての教え子、郷土史研究家　故　土屋夏五郎が揮毫している。



⑦　子安鬼子母尊神

境内に併記する子安鬼子母尊神は、江戸時代の大洪水により上流北巨摩地方から流れてきて漂着したのを拾い上げ、神意によってとの意味で本寺の近くに祀られたものと伝えられているが、明治三十四年新築したお堂が老朽化し、寺の境内の入り口に移転してお堂を新築したがこれも老朽化し、昭和六十三年九月七日に鉄筋二階建て六十坪の鬼子母神堂を完成した。

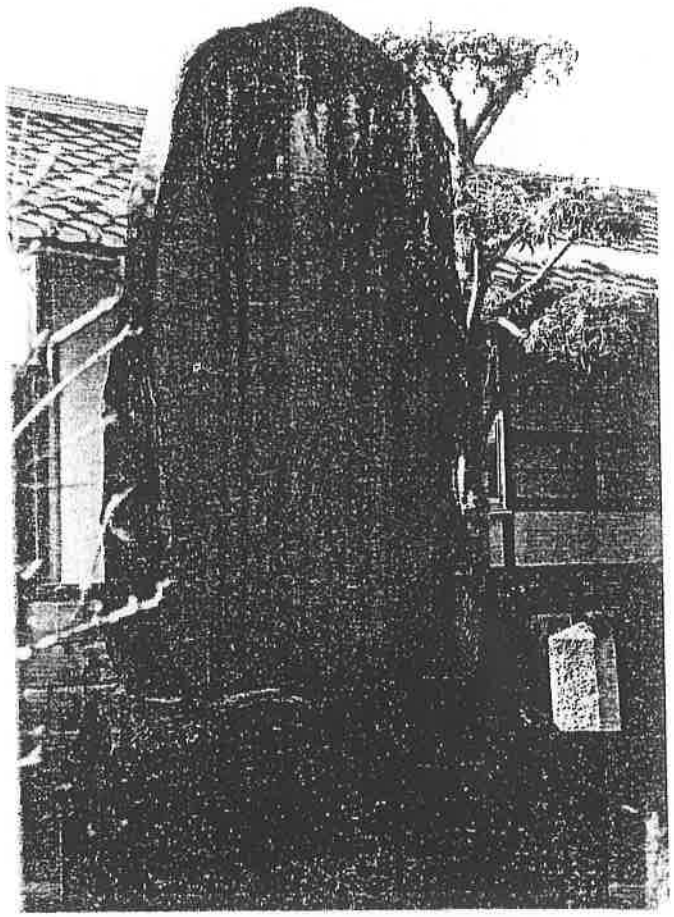
鬼子母神の大祭は九月七日、お題目講は毎月七日夜に行われている。安産の守り神として近郷に知られ、参詣して神願するものが多い。

⑧　皇太子をお迎えした押越八幡

押越の本村にあって、釜田八幡の分霊で区の産土神である。明治四十五年三月、大正天皇がまだ皇太子の頃、陸軍幹部演習御統監のため入峡され、休息場所として八幡社に三月二十九日お立ち寄りになった。

当時の様子を記せば、三月二十九日西八代郡上野村方面御行啓のとき、中巨摩郡旧国母村、旧西条村、旧常永村、旧小井川村、旧花輪村、旧忍村の郡下小学校児童、村民一般が奉送迎した。上野に向かう途中押越八幡社境内で休息をとられ、社殿の傍らの空き地で親しく軍の演習計画をお聞きになった。押越八幡社は同区の南端にあって駿州往還近接の所で、境内社殿ともに小さかったが、清浄で見晴らしがよいので殿下の御野立て地として選び出されたといわれている。押越の部落に通告があったのは前日夕食後で、時の区長三神貞僚は組頭を招集して氏神境内へ歓迎の手配をした。翌二十九日早暁を期して区民総出で、社地及び付近の清掃整備につとめて奉迎した。

同神社には七月、陸軍少将　立花小一郎の選文になる記念碑が建てられた。この建碑直後の七月三十日、波乱に満ちた明治は終わる。



⑨　三神家の秘宝

三神家は押越の名家で、今の昭和町郵便局長　一朗氏で十八代目になる。蔵には古いものが数多く保存されており、享保（一七一六年～一七三六年）の飢饉用にとお上より配給されたお助け米や、木製の長さ三尺の沼沢地に自生した芦を刈るときに用いた道具など家宝として保存されている。

三神家は代々源右門を継承してきているが、天保七年（一八七六年）の大凶作で百姓騒動が起きたとき、暴徒

が押し寄せたり、大正三年の若尾邸焼き討ち事件で端を発した米騒動の時にも、農民が押し寄せるなど、大地主であったため事件に巻き込まれている。この騒動の時槍を突き立てられた天井には今もその跡が残っている。

⑩ 川東の治安維持のため存在した押原分署

明治維新前の警察制度は名主の権限に属しており、五人組の力に負う所が多かった。各村にご用の御旗をたてていけば、どんな秘密な奥間でも土足のままで乗り込み、怪しいと思うものを容赦なく捕縛する権限や家内捜索もできる権利を与えられていて、警察権は、代官所の十手組と名主の権限に任されていた。

明治六年県庁に警察取締係を置き、後この役を廃止して監察係に改め、更に警察係に改めた。

明治十二年郡制を施行し、各郡に郡役所を置くと同時に従来の警察制度を改めて、警察本署・分署の制度を定めて県内に本署一・分署二十一を統括し、巡査二百十名を定員として配置した。中巨摩郡では釜無川以西は旧大井村古市場に、川東は押原に置かれ、現在の中村商店の所に配置された。この年制度の切り替えに押原の巡査屯所は押原分署と改められ、本県二十一署の一つとして登場していたことが明らかである。暫くして押原分署は中巨摩釜無川以東の地区を所管していたが、明治二十四年廃止となり、中巨摩郡竜王村に移され中巨摩郡警察署と改められた。超えて明治二十九年四月、庁舎を新築して竜王警察署となったが、昭和二十三年竜王地区警察署となり甲府太田町に移り、竜王は部長派出所になり昔の名残をわずかにとめているが、それ以前に押原地区にその前身の押原分署の置かれたことを思えば、何となく誇らしい気もする。

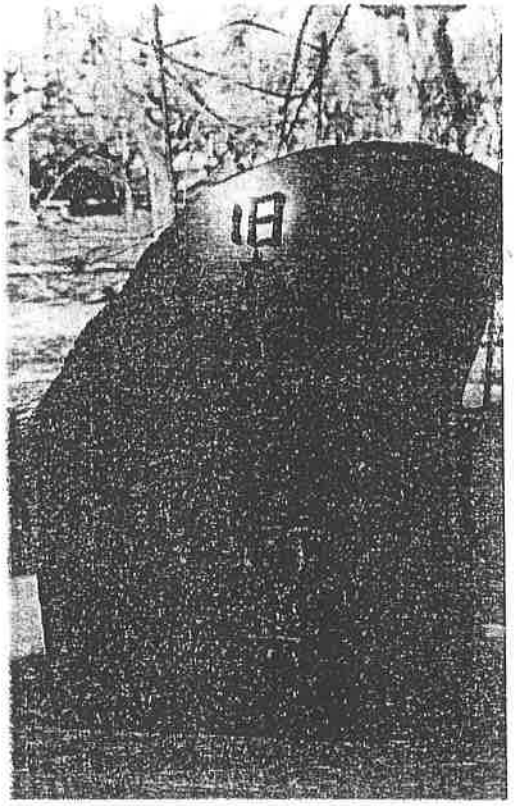
⑪ 現存する大沖積の跡

押越とはその名のとおり鎌田川や東川の氾濫が大きく押し越えてしまったため、地名として残っている。曲淵も本妙寺境内にある竹藪、大イチョウの根が張っていて洪水を防ぎ、そこに淵ができたものであるが、その後の度重なる洪水により埋まってしまった。こういったことから押越本村全体が土砂の堆積によって高くなり、その大沖積の様子が断層となっ

で今も窺えるのが県道市川大門線に沿ったペットショップメルシー東の深い溝川で、大きく例を取れば富士山の伏流水が断層の切れ目から突如白糸の滝となって流れ出しているように深く覗き込むような狭い深さは異常である。その下流は沼天神のある沼沢地で、その湧水がたちまち川を大きくし今川となっている。

⑫ 鎌倉街道の起点標柱

甲斐の国から他州へ通じる通路は昔九条有り、路首はみな酒折から発していた。酒折の南にある三路は、若彦路、中道、河内路と呼び、東には雁坂口、萩原口、鎌倉街道、大門嶺、諏訪口、西には穂坂口があった。河内路は本村に関わりある主要道路であったことは、一度このタイムスリップ路パートワンで紹介しているが、紙漉阿原にある標柱は鎌倉街道の起点として立てられているもので昭和二十年すぎ頃、泉小大氏がたてたものがあったが、昭和四十八年に今のものに立て替えられている。この鎌倉街道は南下し宮原へ続き、西方では楠地蔵まで延び河内路（みのぶみち）に続いている。



⑬ 沼天神のいわれ

紙漉阿原には、三十の小字があります。その小字のひとつに沼天神と呼ばれている所に沼あり、名前のとおり、ここにはお天神さんが祀られています。

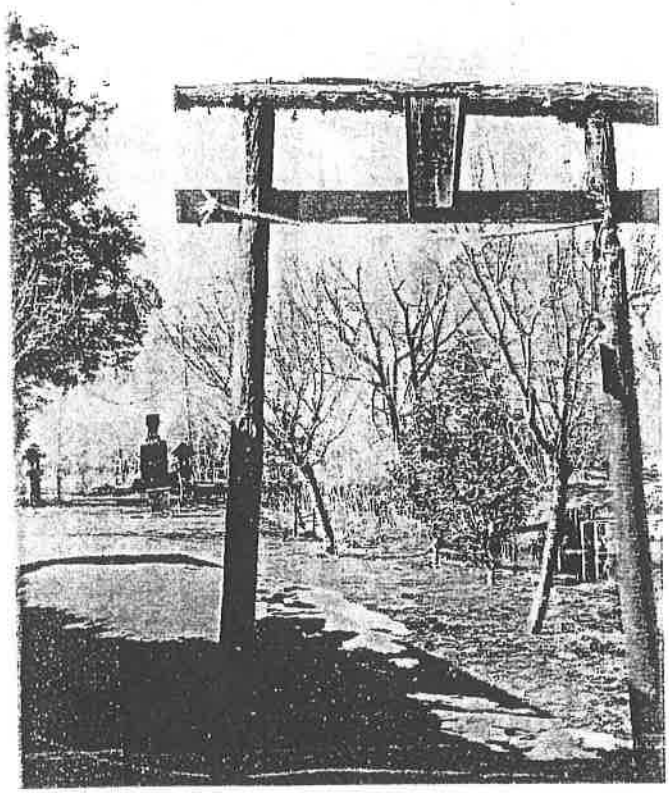
この辺りの、およそ一〇〇アールの土地は、じめじめしていて耕地に向かないのか、今でも蘆が茂っていて、うっそうとしています。そして、至る所にきれいな水が湧いています。

もうその場所も少なくなったけれど、竹藪も近くにあり、清く澄んだ小川には、六月のはじめともなるとホタルが飛び交い、昔ながらの様子を見ることもできます。

さて、沼天神さんですが、昔からの〝言い伝え〟では、沼天神さんは生き神さんで、願をかければ、必ず受けいれてくれる神さんとして、隣村や近所の人たちから、たいそうあがめられています。

むかし、この葭沼のすぐそばに、若夫婦が住んでいました。毎年のように子供が生まれるので、稼がなくてはならない。昼はせっせと働き、夜は夜で、わら仕事に精をだしました。

そんな状態ですので、夜、床にはいるとすぐ、いびきがでる、というときになって、昼と夜とをとっちがえた赤ん坊が夜泣きをはじめだす始末。「アアアー。ホウホウホウ」。夫婦はそう言いながらあやすのですがなかなか効果が上がらず、何日も悩まされつづけ、日を追ってはげしくなるばかりでした。思いあまった夫婦は、近くの沼天神さんにおすがりすることにしました。



すると沼天神さんは、さっそく願い事をきいてくださり、「真夜中に、片足に草履、片足に下駄をはいて私の所にお詣りしなさい」とお告げしてくれました。

夫婦はすぐに、お告げどおりのお詣りをつづけると、何と、たちまち赤子の夜泣きがやんで、以来、百姓の若夫婦

は、しあわせの日々を送ったとのことです。それからの沼天神さんは、小さい子どもの夜泣きに、特に御利益があると、口込みでひろがり、今でも大願成就の奉納として、手ぬぐいや幟などがたえたことはありません。そしてなお、信仰深いある人が鳥居を建てて西天神とし、学問の神さんとしても知れわたっています。

⑭ 木造聖徳太子像

本誓寺本堂脇の間に一躯の聖徳太子像が安置されている。この寺は鎌田山と呼ばれる浄土真宗の寺院であるが、文歴中福泉坊道周によって開かれた。道周は太宰大弐為佐の男、福井六郎補佐で、西応元年八十五歳で入寂した。当初観真と称する天台宗の僧侶であったが、親鸞上人が嘉禄二年から七年間、相州国府津中心に行われた専修念仏に参じ、帰依して上人の直弟子となり福泉坊道周の名を賜った。

貞永元年、行を了えた親鸞が帰洛の際、常に給仕をうけた報恩感謝のしるしにと、道周に自刻の太子像を授けたといい、これが当寺の所蔵する聖徳太子の立像であると伝承されている。

太子は用明天皇の第一皇子で、推古女帝の皇太子となり、その三年施薬院や悲田院をもうけるなど、わが国社会教育事業の先駆をかざり、同じ年高麗の帰化僧慧慈について仏教を学んだ。十二年（六〇四）には十七条の憲法を制定、十五年には隋に使を派遣して大陸文化の摂取をくわだてた。二十九年（六二一）四十九歳で薨去したが、大衆の太子に対する敬慕の念はいよいよ篤く、古くから彫刻とし、また、絵画とされて各地で奉祀、信仰されてきた。

県内で高名なものに、彫刻では甲府市小瀬町仁勝寺本尊や南都留郡勝山村御室浅間社所蔵の太子像があり、絵画には富士吉田市下吉田福源寺太子絵像のほか、各地に多見される。

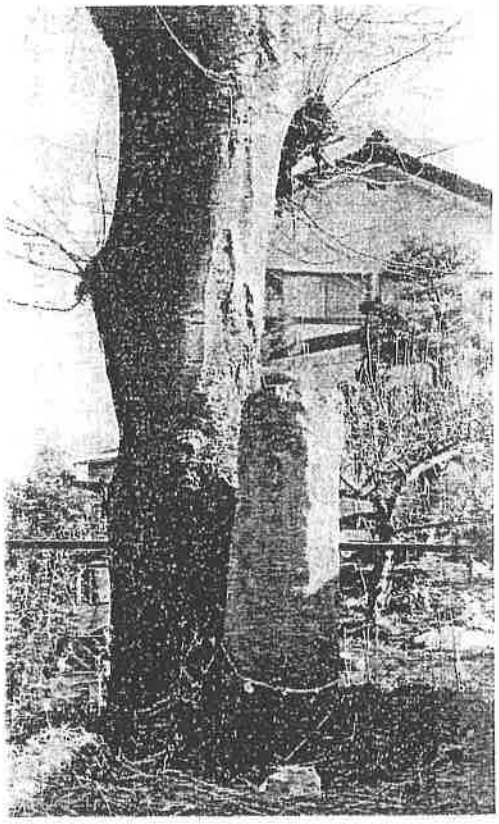
この本誓地蔵は、経年のため蒼然として古色を示すが、框座に立つ檜材の一木造り、彫眼の胡粉地彩色像で、高さ四二・五センチ。花紋を配する袍衣に袈裟を掛け、柄香炉を手にする。いわゆる太子十六歳の孝養像として典型的な形制を示すが、像高一一五・二センチの仁勝寺像（鎌倉時代）に比較すれば小振りであり、頭髪も美豆良に結わず、髪を頭側に振り分け、束ねて長く胸前に下げる。この点富士吉田市福源寺太子堂にかけられた。肖像画に共通する姿である。

本誓寺像の聡明な表情のおかしがたい面貌、衣褶の効果的な表現など、小さいながら重要文化財仁勝寺像にせまるものがあり、県下の一名作として貴重な文化財といえる。

⑮ 棹地蔵

河東中島の旧みのぶ道と高尾街道の合流点近くにある高さ一二〇センチの石幢残欠である。幢身の平面は一辺約二〇センチの六角形であり、上端に柄が造り出されてあるので、中台から上全体が失われたものと推定される。ここは旧道の変わる要所でもあり、六道能化の地蔵尊供養上 格好のところであったと思われる。

幢身の平面が角と円で、時代的に先後があるとは断言できないが、県内では角柱に古いものが多く、室町期初頭のものと推測される。この点からも注目される棹地蔵で、時間を超えて今もなお大衆の信仰を集めている。



⑯ 鼻取り地蔵と虫歯地蔵

築地新居の集落から南へ、河東中島の集落の西を通って上河東の東の境で、県道市川大門線へ出る道がある。幅六尺に満たない野良道で、築地新居から県道へ、それから常永駅へと通じる。

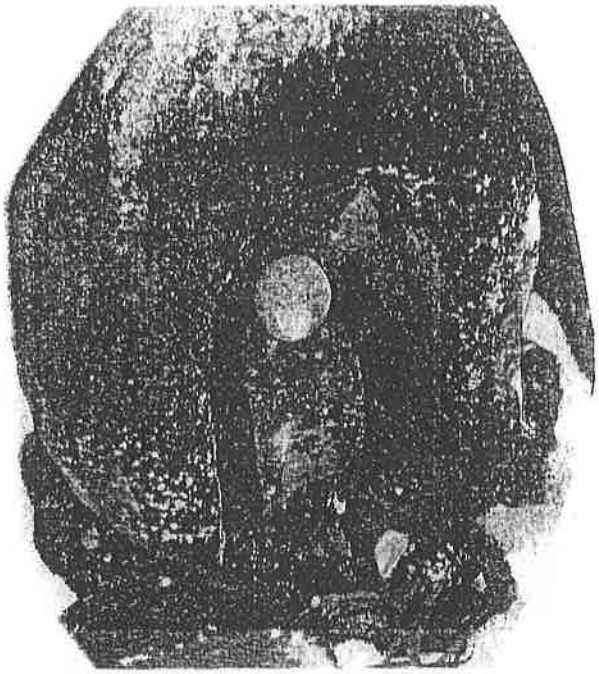
その路端に、お椀を立てかけたように円い石の中にお地蔵様が祀ってある。草に埋もれた路端に、お地蔵様だから、ただ道しるべだけでなく、そこで何か不幸な厄のようなことがあって、その供養のために、昔の人が祀ったのだと思われる。

ある時、それは六月、田植え前のことだと思われるが、馬を使って田を代掻きしていた。万鍬を持って馬の尻につくの

が大人で、鼻面へ九尺ほどの長い竹をつけて、馬の横で、馬の歩くのを突いたり引いたりする鼻取りを、まだ小さい子どもがやっていた。

空が真っ赤に夕焼けして、馬が疲れたのか、どうしても子どもの思うように歩いてくれない。大人は怒って怒鳴るし、とうとう子どもは泣き出してしまい。泣き泣き竹を持って、馬について鼻取りをしていた。その子どもを見るに見かねて、お地蔵様が子どもに代わっては鼻取りをしてくれ、馬も素直に歩いたという。それ以来、集落の人達はこのお地蔵様のことを、鼻取り地蔵と呼ぶようになり、大切に祀ったという。

伝説としてはそれだけだが、そこの小字の地名が花鳥とつけられているのだが、鼻取りと花鳥との音のつながりに因縁めいたものを覚えるし、また地名ではなくて、そのすぐ近くに泣き虫という田の呼び名もあって、あるいは泣いた子どもが働いていた田なのかとも連想されるのである。



昭和三〇年に祠は浅間寺境内、金比羅堂の脇に移し祀られたが、金比羅堂は取り壊され、墓地の入り口にその他の石仏とともに祀られている。もと祀られていた路は圃場整備によって今は跡方もない。

又、この境内には口腔か虫歯の病がもとで亡くなったのを祀ったと思われる首を傾げ頬を片手で押さえている地蔵様三体もある。人々は虫歯地蔵、またはひいらぎ地蔵さんとも呼び、虫歯で病むときひいらぎの葉で地蔵さんの頬をさすり祈ると良いとされ、治るとくろもじの木を削った二〇センチほどの楊子を編んでよだれかけを造り、首から下げて御礼詣りをしたと伝えられている。

鼻取り地蔵